

学芸会台本

はるのさくら



学芸会配役 ★ は高学年から選出

妖怪役

はる () 主役兼練習リーダー ★

赤天狗 () ★

かさこぞう1 ()

かさこぞう2 ()

かさこぞう3 ()

のっぺらぼう男 ()

のっぺらぼう女 ()

のっぺらぼう警察 ()

ろくろっ首 ()

鬼1 ()

鬼2 ()

読み聞かせ母 ()

読み聞かせ子 ()

人間役 (基本1人2役以上) さくら・博士以外

さくら () 主役兼練習リーダー ★

ハザマ博士 ()

読み聞かせ母 ()

読み聞かせ子 ()

子ども1 ()

子ども2 ()

子ども3 ()

子ども4 ()

若者1 ()

若者2 ()

若者3 ()

よっぱらい ()

店員 ()

ニュースキャスター () ★

さくら父 () ★

さくら母 () ★

自衛隊1 () 隊長 ★

自衛隊2 ()

自衛隊3 ()

自衛隊4 ()

自衛隊5 ()

役以外

照明 () ()

エンディングソング () ()

イラストレーター () () ()

① 2つの読み聞かせ

画面に絵本がうつる

「おどろおどろしい音

ステージ左側が人間の読み聞かせ。ステージ右側が妖怪の読み聞かせ

スポット人間側だけを照らす

母親「つかれはてた小僧は、1けんのふるーい小屋を見つけた。日もくれかけて、おなかもすいてきた小僧は、小屋からただよいい香りにすいよせられるかのように、中に入っていった。中に入ると、誰もいない、小僧は小さな声で「だれか、いませんか？」とたずねた。すると「いるよー、いるよー」とだけ返事があるではないか。小僧はあたりを見回すが、やはりだれもない。ふたたび「だれか、いませんか？」と聞くと、先より大きな声で「いるよー、いるよー。」と声がする。これにはさすがに肝を冷やしたのか、小僧は次には「どこに、いるんですかー。」と聞くと、

「おーまーえーのーうしろだー!」と大きな口を開けたやまんばがいるではないか。

幼子「わー」ふとんをかぶる

母親「はい、今日はここまで、もう寝なさい。」

幼子「ねえ、ママ、こわくてぼく、眠れないよ。妖怪は本当にいるの?」

母親「いるわけないでしょ。作り話よ。」

幼子「でも、なんでこんなにたくさん妖怪の話があるんだろう。」

母親「さあね、物好きな人が書いたんでしょ。本当に寝ないと、妖怪がくるぞー」

幼子「わー、こわいよーわかったよーもうねるよー。」

暗転↓スポットを妖怪側へ

画面に絵本がうつる」おどろおどろしい音

妖怪母「つかれはてたやまんばは、1けんのふるーい小屋を見つけた。日もくれかけて、おなかもすいてきたやまんばは、小屋からただよいい香りにすいよせられるかのように、中に入っ
ていった。中に入ると、誰もいない、やまんばは小さな声で「だれか、いませんか？」とた
ずねた。すると「いるよー、いるよー」とだけ返事があるではないか。やまんばはあたりを
見回すが、やはりだれもない。ふたたび「だれか、いませんか？」と聞くと、先より大き
な声で「いるよー、いるよー。」と声がする。これにはさすがに肝を冷やしたのか、やまん
ばは次には「どこに、いるんですかー。」と聞くと、「おーまーえーのーうしろだー！」と大
きな口を開けた人間がいるではないか。

妖怪子「わー」ふとんをかぶる

妖怪母「はい、今日はここまで、もう寝なさい。」

妖怪子「ねえ、ママ、こわくてよく、眠れないよ。人間は本当にいるの？」

妖怪母「いるわけないでしょ。作り話よ。」

妖怪子「でも、なんでこんなにたくさん人間の話があるんだろう。」

妖怪母「さあね、物好きな妖怪が書いたんでしょ。本当に寝ないと、人間がくるぞー」

妖怪子「わー、こわいよーわかったよーもうねるよー。」

暗転↓ハザマ博士にスポット

ハザマ博士登場

ハザマ「いやそんなはずはない・・・そんなはずは・・・」ブツブツ言う

はっとしてお客さんの方を向く

ハザマ「え？ま、まさか・・・み、みなさん、この2つの世界が見えているのか・・・？」

口調を強めて

ハザマ「見えているのかと聞いている！」

お客さんの反応を待つて

ハザマ「おっと失礼、口調が悪くなってしまった。

私は世界のハザマを研究しておるものです。

やはり・・・そうか。交わることのない二つの世界

人間の世界と、妖怪の世界がつながりつつあるのだな・・・

ひずみが、ひずみが広がりつつある・・・

まさか、誰かが妖怪と出会ってしまったのか・・・

いや、ちがうぞ、出会うだけではこうはならん・・・

妖怪と人間が、心を通わせ始めておるんじゃ。

まずいまずいまずい！

こうしてはおれん、すぐに見つけ出さねばならん、

そして、この石で・・・」。

暗転

②ちぐらうはるの出会い

妖怪物の映画が流れる

♪夕方の音楽

子1「はあく映画妖怪大戦争、さいっこうに面白かったな！」

子2 「まさか、あそこで砂かけババアが出てきてさ。」

子3 「みんなの目をつぶしてさ。」

子4 「最後は素手でなぐって倒す。」

子1 「最強じゃん、すなかけババア。」 みんな笑う 少し間を空けてから

さくら 「妖怪って、本当にいるのかな。」

ちんもくのと、さくらの方を見ながら

子全 「あはははは！」

子1 「何言ってるのさくら？いるわけないじゃん。」

さくら 「いやわたしは、いるのかなんて思っただけで。」

子2 「いやいやいや、いないっしょ。」

さくら 「いたら、楽しそうじゃん！」

子3 「いやいや、いないから。」

さくら 「いるかもしれないじゃん！」

子4 「うわーさくら、そういうの信じている人なのね。」

子全 「引くわー」 少し前に行く

さくら 「ま、待ってよー！」

子全 「引くわー」と言いながら前へ走り出す。

さくら 「までー！」

子全 「引くわー」（舞台袖で） さくら一人になる

暗転

背景河原↓ライトアップ

♪川の音

さくら、石を河原に投げる（できたら川に石が跳ね返るエフェクトも）

さくら「はあ、なんなんだよ、あいつら。」石を投げる

さくら「別に、ようかいがいたって」石を投げる

さくら「いいじゃないか。」石を投げる

♪石が当たる音

はる「いてっ！」

さくら「ん？」石を投げる

♪石が当たる音

はる「いてっ！」

さくら「ん？」石を投げる

♪石が当たる音

はる「いたいての！」はる、上手から登場

さくら「はる「え？」一度顔をそらしてまた見合う

さくら「はる「ええ？」一度顔をそらしてまた見合う

さくら「はる「ええ！」がつつり見合う

さくら「か・・・」はる「に・・・」

さくら「かつぱー？」はる「にんげん？」

はる「お・・・お前、に・・・人間か？」

さくら「あ・・・あなたこそ、カップなの？」

お互い、うなずく

はる 「わあくわあくち、近づくな！」

さくら 「ど、どうしたの？」

はる 「だって、人間は妖怪を・・・食うんだろ？」

さくら 「え、それは逆だよ。妖怪が人間に悪さをするんだよ。」

はる 「お前、何言ってるんだ・・・」ここで辺りを見渡す。

はる 「てか、ここどこだ？おらの住んでいた村と、全然景色が違う。」

はる 「この川も形はそっくりだけど、こんな水はきたなくねえ。」

はる 「おら、おら、ただ川で遊んでただけなのに、急に何かに吸い込まれて・・・

それで・・・あいたたた。」

さくら 「ど、どうしたの？」近づく

はる 「そ、それ以上近づくな！」

さくら 「あ、あなたケガしているじゃない。もしかして、私の投げた石が。」

はる 「こんなのへっちゃらだ。それより、おらの里にもどらないと。」

はる、画面の川の方にとびこむ。♪ザブン しばらくして出てくる

はる 「だめだ。水がにごって何も見えねえ・・・あいてて。」

さくら 「やっぱり大丈夫じゃないじゃない。」近づく

はる 「くるな、どうせおまえんち行ったらおら、食われるんだろ。」

さくら 「だから、食べないってば！」

♪電車の音

はる 「ひいっ！な、なんだあのでかい化け物は！」

さくら 「あれは電車よ。あなたこんなところでウロウロしている方が危ないわよ。」

食べたりはしないけど、あなたのことを珍しがって捕まえる人はいるんだから！」

はる 「そ・・・そうなのか？」

さくら 「そうよ！ねえ、もしかしたら私の家に来ない？傷の手当てをしたいの。」

はる 「ほ・・・本当におらのこと、食わねえのか？」

さくら 「しつこいわね。くーわーなーい！」

♪電車の音

はる 「ひい！また来た！わかった！ここはこえーや。お前えんち、

案内してくれ。」

暗転

③ちゅうふいはるの思ひ出

♪家の音楽

さくら 「ただいま・・・」

母 「おかえりなさい。ちょっと遅かったわね。」

さくら 「うん、ごめん。あのね、ちょっとみてもらいたいんだけど。」

母 「何よ、かしこまっちゃって、なんでも言ってよ。」

さくら 「うん、あのね、かっぱのことなんだけど？」

母 「かっぱ？何言ってるの、さくら。かっぱなんているわけじゃない。」

さくら 「うん、でも、ほら・・・」はるを前に立たせる

母 「そうね、うん、うん、これはね、どうみてもね・・・かっぱね。

うん、かっぱね。」

か・か・か・カップー！カップカッパカッパー！あなたー！！」はるをリビングに

父 「うるさいな、今新聞読んでいるんだ。」

母 「あなた、かつぱ、かつぱ、かつぱよー！」

父 「うるさいな、親ならどしつとかまえろ、かつぱなんて・・・」ゆっくりはるをみる

父 「か・・・か・・・カップー！カップカッパカッパー！」

父と母でかつぱかつぱ叫びながらはるのまわりを回り続ける両手はワイにして

母 「あ・・・あなた、名前は？」

はる 「おいら、はる。」

父 「こりや驚いた、お前さん、しゃべれるのか？」はる、うなづく

母 「は、はるちゃんね、まあ、見れば見るほど、かつぱね。」

父 「ああ、こりや大変だ。さくら、どういふことか説明しろ。」

さくら、父と母に説明するそぶり

父 「なるほど、お前の投げた石が当たって、ケガして、元の世界にもどれない？」

母 「で、うちに連れてきた。」

父 「か・・・母さん！こうしちゃおれん！まずは傷の手当てだ。話はそれからだ。」

母 「そ、そうね、はるちゃん、こっちへいらっしやい。」

はる、おそるおそる近づく。

母 「まあ、パッキリわれちゃってるわ。大丈夫よ。母さんこう見えて、看護師だから。」

はる、びくびくしながら、治療を受ける。

母 「はい、おしまい！完治するまで少し時間がかかるわ。はるちゃん、

今夜寝るところはあるの？」

はる、首をふる

母 「それなら、ここに泊まって行きなよ。外はもう暗いし」

父 「うんうん、うちの娘が傷つけてしまったしな、あてが見つかる

までうちにいていいぞ。」

さくら 「母さん、父さん、でもかつぱだよ。」

父 「さくら！お前がけがをさせたんだ。しっかりと面倒見なさい。」

母 「それによくみたら、愛嬌があってかわいいじゃない。」

父のセリフから徐々に暗転

父 「でも、あれだな、周りに知られたら、色々と面倒なことになる、いいか

みんなこのことは我々だけの秘密にしような。」

母 「はるちゃん、外へ行くときは帽子を深くかぶるのよ。」

はる 「お、おう……。」 完全に暗転

はるはるのストーリーがアニメで流れる

(ナレーションの声)

こうして私とカッパのはるの不思議な生活が始まった。はるは好奇心が旺盛で、家の中の冷蔵庫やピアノ、掃除機、いろいろなものに興味を持った。毎回新しいものを見るたびに目をまんまるにしておおはしゃぎ。はるの故郷の話もしてくれた。はるの故郷はとてもきれいな自然の中で、川の水もそのまま飲めたり、ゴミで汚れていることなどは決してないきれいな里の中に住んでいる。ここには私たちも驚いた。

はると色々な所へ行った。時間が経つのも忘れて、たくさん話した。はるは私の悩みも聞いてくれ

た。私たちは幸せだった。だから、はるが川に何かを探しに行く時はいつも不安になった。季節は進み、春から、夏、夏から秋、秋から冬、そして春。あっという間に1年がすぎようとしていた。

桜の木↓ライトアップ

はる 「ここにも桜の木があるんだな。おいらの里と同じだ。」

さくら 「うん、満開になるとすごきれいになるんだよ。」

はる 「へえ、おいら、さくらと見てみたいな。」

さくら 「うん、一緒にみよう。」

はる 「約束な。」

暗転↓スポットライトを博士に

ハザマ 「みなさん・・・また会いましたね。」何かを探している

ハザマ 「ところで、カップを1匹、見かけませんでしたか？」

ハザマ 「見かけなかったかと聞いている！」

ハザマ 「ああ、また口調が強くなってしまった。すまん。やはり、見えているんじゃない。」

ハザマ 「いかん、いかんぞ・・・世界のひずみがどんどん大きくなっておる。間違いない、

人間と妖怪の心が通じ合ってきているんじゃない。このままでは

両方の世界にまで影響が出てしまうかもしれない・・・早く見つけ出さないと・・・」

暗転

④妖怪の里へ

ライトアップ

はる 「さくら！さくら！起きろって！」

さくら 「何よ、こんな朝早くに。」

はる 「さくら！大変なんだ！おいらついに見つけたんだ！」

さくら 「見つけたって、何よ。」まだ布団の中。

はる 「おいらのいた里にもどるみちだよ。やっぱりあったんだよ。

あの川の底に。」

さくら 「え、そうなの？え、ちょ、ちょっと待ってよ。」さくら布団から起き上がる。

はる 「川の石をどけたら、なんかウズみたいなのがあつてさ、そこに顔突っ込んだらおいらの

里が見えたんだ。まちがえねえよ。あそこから帰れる。」

さくら 「そう・・・良かったね。」

はる 「なんだよ、さくら、全然うれしそうじゃねえな。」

さくら 「はる、帰っちゃうの？」悲しげな声で

はる 「うん・・・ここでのくらしはすんげえ楽しかった。さくらの父さん母さんにもいっぱい

世話にもなった。でも、おいら、帰らねえと。里のじっちゃんも心配してるはず。」

さくら 「前に話していた赤天狗の？」

はる 「うん。」

さくら 「そっか、うん、そうだよね。帰るよね。ふつー帰るよ。うん。良かった。」

はる 「さくら、うれしくなさそうだぞ。」

さくら 「そんなことないよ。うれしいよ。で、いつ行くの？」泣きそうになりながら

はる 「もう、待つちゃいらねえ。今日、これからだ。」

さくら「そうなの！大変！」あわてて上手へはけて

さくら「おとうさん、おかあさん」と叫んで呼ぶ

暗転

河原の場面

母「もっとゆっくりしていても良かったのよ。はるちゃん。」

父「また、すぐにでも遊びに来いよ。」

はる「世話になった。ありがとなみんな。」

母「ああ、はるちゃん」はるの手をとり、

母「元気でね。」

「」で下を向いてふてくされているさくらをこづいて

父「おい、さくら、何かしゃべれ！最後かもしれないぞ！」

母「ごめんね、はるちゃん、さくら、むすっとしていて。本当はさみしいのよ。」

はる「いいよ、父ちゃん、母ちゃん。」

はる「じゃあ、いくな。またな、みんな！」

はる、画面上の河原のうずの中に入って行こうとする。

さくら「まって！はる！」

はるの手を取りうずへ飛び込む。

父母「さくらー！」

うずは光だし、やがて消える。

暗転

⑤ 赤天狗とのせつしよく

妖怪の里の映像が流れる

自然の背景↓ライトアップ

さくら「き、きれい。これが妖怪の世界の景色。」

はる「おいらの言ったとおりだろ。妖怪の世界はきれいなんだ。

ってか、おい、さくら！何でついてきたんだ！」

さくら「いいでしょ！別に。」

はる「よくねえよ。どうすんだよ。これから。」

さくら「大丈夫よ。ほらみて、あのうず。またもどれるでしょ。」

はる「そうかもしれないけど、お前の父さん母さん心配するぞ。」

さくら「少しだけだから、おねがい！」

はる「・・・わかったよ。じゃあ、おいらのじいちゃんにあったら、

すぐに帰れよ。」

さくら「わかった。わかった。」

暗転

妖怪の里の映像が流れる

(ナレーションの声)

そこから、私たちは1時間ほど歩いた。この世界はずっときれいで、そこには私たちの知っている妖怪なんて住んでいるようにとはとても思えず、私はただただ景色に見惚れていた。

赤天狗の家↓ライトアップ

はる 「じいちゃん！」

赤天狗 「はる！はるなのか！」 赤天狗にかけよるはる

はる 「そうだよ、おいらだよ。」 抱き合う二人。

赤天狗 「おお・・・お前がいなくなつてどれだけ心配したか。」

はる 「そうなんだ、おいら変なうずに巻き込まれて、人間の世界に行っていたんだ。」

赤天狗 「人間の・・・こういうことだ、はる。」 少し距離をおく

はる 「おいら、人間にあつたんだ。」

赤天狗 「人間だと・・・まさか、それは本当なのか。」

はる 「うそじゃねえよ。ちよっと、待っててくれ。」

暗転後、はるにスポット

はる、舞台下に隠れていたさくらを連れていくとする。

さくら 「ちよ、ちよっと本当に大丈夫なの？」

はる 「大丈夫だって、おいらのじいちゃんはこの里で一番えらいんだ。

きつとさくらのこと、気にいるって。」

はる、さくらを上へつれていく

ライトアップ

はる 「しょうかいするよ、じいちゃん、人間のさくらってんだ。」

赤天狗 「おおおお、おお、人間だ。本当に人間がおったのか。し、信じられん。

はるよ、詳しく何が何なのか教えてくれ。」

はる、赤天狗に詳しく伝えるみぶり

はる 「でね、おいらも最初はびっくり、でも人間ってねじいちゃん、人間って、思っていた

よりさ

はるの言葉をさえぎるかのように

赤天狗 「すまぬが、その人間、今すぐに帰ってくれないか。」

はる 「じいちゃん？」

赤天狗 「この人間をみて合点がいった。はるよ、お前がいなくなってからこの里の川は少しずつ

よごれ、山の木々は枯れ出した。調べていくうちに、うずのようなものから、その汚い

ものがこの里に出てきていることがわかったのだ。わしも人間などは信じていなかったが

間違いない、この者の世界がこちら側にあふれ出しているにちがいない。

妖怪達にこの現状をわしは伝えなくてはならない。

人間よ、妖怪達はお前をゆるさないだろう。はるをここまで連れてきてくれたことは

礼を言う。だが、これ以上、我々に関わらないでくれ！」

はる 「じいちゃん！そんなのひどいよ！」

赤天狗 「黙れ！お前にこの山のひめいが聞こえるか？川のすすりなく声が聞こえるか。

わしらはもう我慢できぬ！」

はる 「じいちゃん！おいらの話を」

赤天狗「集え！我が同胞よ！」

暗くおどろおどろしい背景＋照明

※ここからはようかいのシルエットと声だけ

妖怪全「ああ、ああ、ああ、ああ！」徐々に大きく不気味な声に

おに1「人間がいるぞ」

おに2「人間だ。」

妖怪全「ああ・ああ・ああ・ああ・ああ」徐々にさらに大きな声に

さくら「きゃあ！」

はる「や、やめてくれ！みんな！」

赤天狗「去れ！人間！」

妖怪全「ああ・ああ・ああ・ああ・ああ」徐々にさらに大きな声に

はる「う、この数、だめだ、みんな怒りで我を失っている。

じ、じいちゃんもなんか変だ。さ、さくら

ここはおいらが何とかするから、たのむ、行ってくれ！

元きた道をもどってうずにとびこんでくれ！」

さくら「でも、あなたは、あなたはどうなるの？」

はる「おいらは大丈夫。は、早く行ってくれ、さくら！」

さくら「私たち、また、会えるよね。」

はる「ああ、約束だ。」

手を取り合い

二人「約束だ」「約束ね。」

さくら、下手へ走っていく。

妖怪全「ああ・・ああ・・ああ・・ああ・・」

暗転後、スポットを赤天狗へ

♪戦闘の音楽

赤天狗「みなもの！今し方はつきりとした！この里の異変は全て、人間界から流れてくる
まがまがしいもののせいであつた！人間はやはり、危険な生き物であつた。

妖怪全「おう！おう！おう！おう！」

赤天狗「今宵より、我々は、あの人間のたどつた道をゆき、

人間界に行く。そして、我々の存在を、我々の思いを届ける時が来たのだ。」

妖怪全「おう！おう！おう！おう！」

赤天狗「今こそ、みせてやろう！我々の思いを、この里を思う心の強さを。」

妖怪全「おう！おう！おう！おう！」

はる「じいちゃん！じいちゃん！くそ、周りの声がうるさくて声が届かない。」

赤天狗「みなもの、出発じゃ！」

妖怪全「おうー！！」全力で叫ぶ

影が動く演出、そこにはるが取り残される。

はる「はあ、はあ、まずいことになった。さくら・・・おいちどうしたら・・」

暗転

うずは光だし、やがて消える。

さくら「はあ、はあ、も、もどつてきた？」

母 「さ、さくら?」

父 「おーさくら!」

さくら 「父さん!母さん!」

母 「あんたいきなりいなくなったから、もう私たち、どうしたらいいかわからなくて。」

父 「母さん、いいじゃないか、さくらはもどってきたんだ。」

母 「そうね、それで、はるちゃんは?」

父 「向こうの世界はどうだったんだ?」

さくら、ふたりに伝える演技

母 「まあ、なんてこと。私たちの世界がむこうとつながって。」

父 「それは、おこるよな。自分たちの世界がよごされたら。」

さくら 「うん、でも、向こうの一番えらい、赤天狗さん、そんなに悪い人に

は私、思えなかった。だって、自分たちの里を守るためにおこって

いたんだもの。」

母 「そうなのね。」

父 「だが、この辺りも、あぶなくなるかもしれない。みんないそいで帰るぞ。」

母 「そうね、このうず。」

父 「ここから怒りで我をわすれた妖怪たちが」

父母 「押し寄せてくるかもしれない。」

暗転

⑥ 妖怪達のメッセージ

「コンビニ」の背景＋ライトアップ

♪「コンビニに入る効果音

店員 「いらっしゃいませー」

若者1 「つたくまじだりー!!」

若者2 「わかるー!!」

若者3 「ほんとそれ!!」

若者1品物を店員に渡して

店員 「ガムが1点と、チョコレートが」

若者1 「そういうの、言わなくていいから、早くしてくんない？」

若者2 「わかるー!!」

若者3 「ほんとそれ!!」

店員 「はい・・・ではお会計が

若者1 「そういうの、言わなくていいから、早くしてくんない？」

若者2 「わかるー!!」

若者3 「ほんとそれ!!」

店員 「520円になります。」

若者1 「ほらよ!!」お金を投げる

店員 「ああ」お金を拾う

若者全 「あひゃひゃひゃ。」

若者1、外へ出て、菓子を食べるが、ゴミをすてる

若者1 「はあ、ゴミとかまじだりー!!」

若者2 「わかるー!」

若者3 「ほんとそれ」 みんな「ミをすてる

すると、突然雨が降ってくる

♪おどろおどろしい音

若者1 「うわ、ついてね。いきなり雨かよ。」

若者2 「かさ、かさ!」

若者3 「おお、あそこにかさあるぞ。」

若者が近づくと、かさごそう123が動く

かさ1 「おいお前」

かさ2 「おいお前」

かさ3 「おいお前」

かさ全 「おいお前」

かさ1 「今何すてた。」

かさ2 「今何すてた。」

かさ3 「今何すてた。」

かさ全 「今何すてた。」

♪ここからダンス このセリフをリフレインしながらおどる

若者全 「ひ、ひえー!」 気絶する。

かさ全 「2度と「ミをすてるな!」

暗転↓ニュース速報が流れる

キャス「たった今、東京から不思議な情報が届きました。ゴミを道端に捨てた

若者達が、大きなかさの形をした、妖怪みたいなものに襲われたそうです。

若者達のSNSでは動画も流通しており、AIによるフェイク動画であろうと専門家達は語っています。」

居酒屋↓ライトアップ

よっば「ういーよっばらったー」ふらふら歩く。

よっば「あらよつと。」

缶をそのへんにすてる

よっば「ういー今日もいい日だぜ。」

♪おどろおどろしい音

のぺ男「あの一う。」缶をひろってわたす

よっば「はいー?」

のぺ男「落としましたよ?」

よっば「はあ?おれは捨てたの。」

のぺ男「いえいえ、落としましたよ。」

よっば「はいはい・・・」受け取って、

よっば「あらよつと。」また捨てる

♪おどろおどろしい音

のぺ男「あの一う。」缶をひろってわたす

よっば「おまえ、しつこいな!捨てたって言ってるだろ。」

のぺ男「・・・」だまって缶をおしつける

よっば「いい加減にしろよ!ちよつとツラをみせろ!」

顔を上げさせる。」恐怖の音源

よっぱ「ひ……か……かおが……かおが……ないー！」

「わー！」走って、のぺ女のところまでいく

よっぱ「ちょ、ちょっとその女の人、の……のっぺらぼうが出たんです。助けてください。」

のぺ女「のっぺらぼう？それはどんな人？」

よっぱ「か、かおがないんです。」

のぺ女「そう……それは、こーんな人かしら？」顔を、見せる。

よっぱ「ひ……こ……こっちもだー」腰を抜かしながらも走る。

「ひいー！」走って警察のもとへ

よっぱ「よかった、おわりさん。のっぺらぼうです。のっぺらぼうが出たんです。」

のぺ警「のっぺらぼうですか……それは、こーんな顔かな？」

よっぱ「ひー！」

♪マンボーの音楽

この音楽に合わせて、よっぱらいとのぺ3人がずっとおどかし続ける。

ラストでよっぱらいが気絶。

のぺ全「まちをよごすな！」

暗転→ニュース速報が流れる

キャス「またまた妖怪騒動です。今度は、のっぺらぼうを見たという声が相次いでいます。

SNSに投稿された動画にもはっきりとその様子がうつっており、いたずらには

よくできすぎていることと、見たという声が増えてきていることなどから、事態の真相を

究明しようと地元の警察が動き出しております。皆様におかれましても、不審な人物等に

は近づかないようにしてください。

公園↓ライトアップ

子1 「なあなあ、妖怪の話、聞いたか？」

子2 「ちよっとリアルだよな。」

子3 「大丈夫だって！妖怪なんていないよ。」

子4 「そうそう、気にすることないって。」

子1 「なんでもさ、ゴミ捨てたり、木を切ったり、地球によくないことをすると
現れるみたいだよ。」

子2 「ええ、まじで？」

子3 「じゃあさ、おれらもさ、ゴミとかすてたら、妖怪が出てくるってこと？」

子4 「何それ、あほくさ。」

子1 「・・・やってみるか？」

子2 「ちようどアイスのぼう、おれ持ってるし。」

子3 「いやいや、出てこないだろ。」

子4 「うんうん。」

子2 「いくよ？それ！」アイスのぼうをなげる シーン・・・

子3 「ほら、なんもなかったじゃん。」

子4 「あほくさ。帰ろう帰ろう。」

子2 「あ、まってよー！」

子1 「ほら、あいのぼう拾ってこいよ。またな！」子124帰る。

暗転↓ライトアップ

子2 「なんだよまったく……。たしかこのへんに……」

♪おどろおどろしい音

ろくろ 「あなたの落としたぼうはこれかしら……」

子2 「あ、それです。どうも。」

子2 受け取りにいくが、途中で転んでろくろにぶつかる。

子2 「あ、すみません。」

ろくろ 「きゃあ。」首が伸びて落ちる。

子2 「ひ、ひい！首がのびた！」

ろくろ 「みーたーなー！」

子2 「ひ、ひい！！」走って逃げるが、

ろくろ 首の首が伸びておいつく。(すっごく伸びる)

ろくろ 「ごみをひろって帰りなさい！」

子2 「ひ、ひいー！」気絶

暗転↓ニュース速報が流れる

キャス 「大変です。街に、街に妖怪がはびこっております。もはや妖怪に出会わない日は

ないと言っても過言ではないかもしれません。事態を重く見た政府は自衛隊を派遣し、

事態の收拾に向かうようです。ほとんどの学校は臨時休校の対応を取り、スーパーなども

営業を見合わせております。街は閑散としています。

暗転↓ハザマ博士にスポット

ハザマ「いかんいかんいかんぞ・・・」

「どこだ、どこにいるんだ、かつぱと、少女の二人は・・・」

早くしないと取り返しのつかないことになるぞ・・・」

携帯を見る。

「い・・・いた！見つけた・・・見つけたぞ！！」

暗転

⑦はる さくらの再会スポット家族へ

父 「大変なことになってきたな。」

母 「ええ・・・」

母 「さくら、元気出なさい。はるちゃんなら、きっと大丈夫よ。」

父 「どれ、今はどうなっているか」リモコンでテレビをつける

ニュースが画面に流れる

キャス「ついに、自衛隊が動き出しました。武装をした自衛隊が妖怪達を追い詰め、

包囲しています。たくさんの妖怪達が自衛隊に捕まっています。」

さくら「はるだ！今、はるがいた！」

母 「ああ、本当だはるちゃんだ。」

父 「まさか・・・」

さくら「これって、この辺だよ。私行ってくる！」

父 「だめだ、さくら、外はあぶない！」

母 「そうよ、だめよ！」

さくら 「母さん、父さん、お願い！私をあそこまで送って！」

わたし、はると話がしたい。」 鬼気迫る声 表情

父、母顔を合わせて ためいき

父 「どうせ止めてもいくんだろ。」

母 「そうね、私もはるちゃんを助けたいわ。」

父 「危ないと思ったら、すぐに帰るからな。」

さくら 「父さん、母さん、ありがとう。」

暗転

暗転↓ニュース速報が流れる

キャス「自衛隊により妖怪達はなす術がありません。降伏するかのようにひざまずいております。」

おおっと、怯える妖怪達の前に何やら天狗のようなものが現れました！誰かをよんでいる

ようです。 なななな・・なんと、2体の鬼が現れました！！」

ライトアップ

妖怪達がすみのほうでおびえている ↓自衛隊のテーマ

自衛2 「全たーい、とまれ！」 123で敬礼

自衛2345 「隊長！もう一息であります！」

自衛1 「うむ！我々はなんだ！」

自衛2 「われわれは！」 けいれい

自衛3「日本最強の」けいれい

自衛4「自衛隊そしき」けいれい

自衛5「SRT」けいれい

自衛2345「スラットであります。」12（足踏み）3で敬礼

自衛1「うむ！あと一息である。市民を守るのが我々の仕事だ、妖怪達にこれ以上

自由にさせるな！」

自衛2345「イエッサ！」けいれい

自衛2「むむ、なんだあの天狗は」

自衛3「何かをよんでいるぞ。」

自衛4「ははは、何をよんでももうおそい」

自衛5「我々の勝利は見えている。」

♪鬼のテーマ曲＋巨大な足音 足音の度に自衛隊上に飛ぶ

赤天狗「人間達よ、もう許さんぞ。やれ、鬼達よ。」

鬼12「おお・・・」ゆっくり近づく 足音の度に自衛隊上に飛ぶ

自衛2「た・・・隊長、どうしましょう。」

自衛3「こっちに来ます。」

自衛4「こわいつす！」

自衛5「は・・・発砲許可を。」

自衛1「う・・・うむ・・・」

鬼12 首をコキコキ鳴らしながら鉄棒をかまえて 前進

自衛2「隊長」

自衛3「こわいつす！」

自衛4「こわいつす！」

自衛5「発砲許可を！」

自衛1「う・・・撃てえ！」

♪マシンガン↓金属音

自衛2「隊長、全部防がれました。」

自衛3「隊長、鬼が近づいてきます。」

自衛4「隊長、かくなる上は」

自衛5「隊長、かくなる上は」

自衛1「た・・・退却〜！」

♪スローモーション（曲）

ゆつくりと鬼達においつめられていく。最後は妖怪達も入り

囲まれる。

赤天狗「さあ、人間達よ。観念しろ。」

妖怪全「観念しろ。」

はる「ま・・・まってくれ、じっちゃん！みんな！」人間をかばう

赤天狗「どけ、はるよ。こやつらが何をしたか見ていただろう。」

はる「そうだけどさ、じっちゃんたちだって同じじゃねえか！」

赤天狗「何だと！」

はる「怖がらせてどうするのさ。ちがうだろ、じっちゃん。」

自衛2「隊長・・・何やらもめてますよ。」

自衛3 「これはチャンスですよ。」

自衛4 「形勢逆転ねえます。」

自衛5 「せーのでいきましょう。」

自衛1 「いくぞ、せーの」

はるに銃を向けて囲む。

自衛1 「ははは、形勢逆転だ！」

赤天狗 「ぐぬぬ……どこまでも汚いやつらじゃ。」

さくら 「もうやめて！」花道を走ってきて、自衛隊をおしのけてはるのもとへ。

はる 「さくら！」

さくら 「はる！」手を取り合う。

はる 「さくら、会いたかった。」

さくら 「わたしも。」

自衛2 「おじょうさん、そこをどいてもらえますか、妖怪はとても危ない生き物だ。」

さくら 「いやよ。どかない。妖怪は危ない？なんでそうやって決めつけるんですか？

おじさんは妖怪の何を知っているんですか！妖怪はとっても心がきれいなんです。

私たちに必要なのは、話し合うことなんじゃないですか。」

はる 「じいちゃん！頼む！わかってくれ。」

赤天狗 「……だめだ！それでも人間を許すことはできない！！

いけ、みななもの！」

妖怪達が動き出す。

ハザマ 「はあ……はあ……そこまです。みなさん、動かないで。」

ハザマ「動かないでと言っている！」

この声で妖怪と人間が完全に静止 時が止まる。

ハザマ「ああ・・・またクセで口調が強くなってしまった。」

ハザマ「ずっとこの時を待っていました。」石を取り出してかかげる

はる 「その石は何だ？」

ハザマ「二つの世界の間、「ハザマ」に昔から存在していた石じゃ。」

さくら「ハザマ・・・？」

ハザマ「人間の世界と妖怪の世界、本来この二つの世界が交わることはない。」

さくら「ではなぜ。」

ハザマ「始まりは、人間の世界が汚れすぎたことで、二つの世界に小さな傷ができたのじゃ。」

「そして、その小さな傷から1匹のカップが人間の世界にまぎれこんだ。」

さくらとはる、顔を見合わせる。

ハザマ「そして人間と出会う。二人が心を通わせたことにより、2つの世界がつながってしまった。」

さくら「じゃあ、私たちのせいだ。」

はる 「おいらがきたことで・・・。」

ハザマ「いや、どのみち傷は大きくなるばかりだったから、いつかはこうなったであろう。」

さくら「私たち、どうすれば。」

ハザマ「何、そんなに難しいことではない、はざまの場所で、この石を二人でさわれば世界は

閉じる。お二人さん、その場所に案内してくれるね？

さあさあ、急ぎますよ。みなさん！ちよっとどいてくださいね。

博士達がすぎた後、また両者は睨み合い、戦いを続けようとする。

⑧別れの桜

満開の桜の河川敷↓ライトアップ

ハザマ「おお、ここか。」

さくら「ここで、その石にさわれば、世界は閉じるんですよ。」

はる「早くやろうぜ。」

ハザマ「うむ、助かる。ただし・・・お主らに一つ言っておらんかったことがあるんじゃない。」

はる「何だよ。」

ハザマ「なぜ、世界が閉じるか、それは君たちが通わせた心がこの石の中にいくからなのじゃ。」

さくら「ど・・・どういうこと。」

ハザマ「なくなるんじゃないよ。二人の間であつたことが。」

はる「なんでだよ!」

ハザマ「他の人間も妖怪もそうじゃ。お互いいなかったことになるんじゃない。そうじゃなければ、

二つの世界はつながり続けてしまうからの・・・。」

さくら「そんな・・・はる・・・私・・・嫌だよ。」

はる「・・・さくら・・・。」

♪遠くから聞こえる怒号の声

ハザマ「遠くから怒号が聞こえてくる。人間と妖怪が戦っておる。もう、時間はないのじゃ。」

はる「さくら、見て、満開のさくらだ。」

さくら「何言ってるのよ。」

はる 「前に、約束しただろ。」

さくら 「あ・・・うん。」

はる 「一緒に、みれたな。」

さくら 「うん。」

はる 「さくら、おいら楽しかったよ。」

さくら 「私も。」

はる 「もし、もしさ、忘れちゃっても、おいら、里でこの桜をみたら、

絶対にさくらのこと思い出せる気がするんだ。そしたらおいら、

全力でさくらのこと叫ぶから！だから。」

さくら 「うん・・・うれしい・・・うん、わかったよ、はる！」

石に手を伸ばす二人。

ハザマ、二人に頭を下げる。

さくら 「はる、またね！」

はる 「ああ！」

石が光り出し、全てが元に戻っていく

ニュースの場面

キャス「東京周辺で起きた、不可解な騒動から1年が経ちました。気がつくと路上でねていました

という人が複数現れたこの騒動、ほとんどの人に共通して言えることは直前にゴミを捨て

たからということだけがわかり、都内ではクリーン活動が活発に行われています。さて、

今日の占いはー」リモコンで消すさくら

さくら「お母さん、行ってきます!」

母「はい。」

桜の背景

さくらの心の声　　中、歩いている様子（さくらが河川敷を）

1年間、何か心がずっともやもやしてきた。このもやもやが何かわからないまま、私は日々をすごしてきた。ただ、川を見ると懐かしくなるのは何でだろう。何か大切なこと、いや誰かのことを私は探している気がするんだ。たしか・・・たしか・・・

はる（声だけ）「さくら!」

さくらがふりむくと

エンディング。